

西村山郡大江町勝生・道知畑・南又について——」（『山形県高等学校教育研究会社会部会研究集録』第一一冊、一九七四年）、「豪雪地帯の山村の廢村過程——山形県朝日山地周辺を中心として」（『同上』第一二号、一九七五年）、「合理化政策による集落再編成——山形県朝日山地の集落を事例として——」（『同上』第一三号、一九七六年）、「合理化政策における集落再編成」（『地域社会研究』創刊号、山形地域社会研究講習会、一九七六年）を発表しているが、そこではまず医療施設が市街地にまとめられ、「国道から離れたものには、降りてもらつてめんどうを見る効率主義が前面にでている」状況が浮き彫りにされている。そして、彼は「少ない予算を出来るだけ有効に使う」とこと、「これこそ住民福祉と嘯いて」集落移転を強行した「町当局」の安易な態度を鋭く批判する。

もう一つは農林省農業総合研究所の須永芳顯氏の「集落移転の実態（一）——山形県小国町の事例分析——」（『農業総合研究』第三〇卷第一号、農林省農業総合研究所、一九七六年一月）、「集落移転の実態（二）——山形県白鷗町および最上町の事例分析——」（『同上』第三〇卷第二号、一九七六年四月）である。この仕事はなお未完であるが、須永氏はこれまでの集落移転の実態調査から「全面的脱農化によってもたらされた“過疎”に対する最も有效的な対策として行われている集落移転は、辺地農業を崩壊させることによつて、ますます全面的脱農化を促進する作用をはたしているのである。そしてその底に流れているのは過疎地切り捨ての論理である」と結論づけている。

一つは山形県立山形東高等学校教諭の本間惣太郎氏によるものである。彼はこれまで「朝日山地東部の離村過程について——山形県

後記

記

今号の編集にあたつては、安原茂会員の手を煩わした。

私は、第百号所載の第一回研究会（東北地区）の席上で、山形県にみられる農民の“生活破壊”的事例として、行政主導で推進された集落移転の紹介を行ない、その後の研究会でも折に触れてこの問題について発言してきた。ここで山形県における集落移転に関する主な研究業績の整理をしておこう。